

いま太陽光発電はどうなっているの？

林 敏 秋 (ワーカーズコープエコテック)

太陽光発電業界が活性化している。確かに太陽電池に関する関心は高まっているし、販売額も伸びている。国の補助金の窓口をしている太陽光発電普及拡大センター（J-PEC）によると09年度（09年4月～10年3月）の補助金受理件数は144,601件のぼるという。補助金が復活する08年度までは年間5万件前後だったので2倍以上の伸びを示している。実際、国内メーカーの製品は注文しても2ヶ月近く待たなければ手に入らない状態だ。

補助金も10年度住宅用401億円、地域新エネルギー導入支援事業など法人向け345億円の予算が国会を通過した。住宅用は、補助金額7万円/kWでシステム価格が65万円/kW以下のものが補助対象だ。09年度から5万円下がった。価格を下げているという国の意向が表れている。地方自治体も補助金を出すところが増えている。京都府、京都市、宇治市、亀岡市、久御山町、宇治田原町などその数は増加傾向にある。

買取価格も昨年11月1日以降、10年度は10kW以下は48円/kWhで10年間の買取が決まっている。更に全量買取制度の実施に向け、各地でタウンミーティングが開かれ、住宅用太陽光発電は42円/kWhという買取価格が提案されている。

太陽光発電を設置するにはハードルがずいぶん低くなり、販売業者が売り込む段階から消費者が買い求める段階に移行しはじめている。それに伴って様々な問題も浮き上がりだしている。太陽光発電は殆どが訪問販売だ。しかもオール電化との併売が常識となっている。中にはオール電化製品をつけないと太陽光発電も設置できないと勘違いしている人もいる。全くの誤解である。オール電化は、原発などをベース電源としているために夜間に電気が余っているの、その余剰の電気を売りたい電力会社の一時的な販売戦略でしかない。太陽光発電とは別物だ。話を元に戻すとその訪

問販売などの苦情が増加しだしている。施工不良の苦情も増えている。業界が活性化してきたので猫も杓子も太陽光発電なのだ。オール電化に圧迫されていた大阪ガスも「軍門」に下って太陽光発電を大々的に売りだした。経験が1、2年の販売施工業者が急増してきている。明らかに知識不足、経験不足である。メーカーの拡大戦略も一因だ。業界が拡大する時にはよく見られる「質より量」の傾向が強い。製造販売メーカーも中国や韓国製を含め20社以上登録されている。太陽光発電業界は、コスト競争をふくめて一種の「戦国時代」に入りつつある。

拡大、流動化する時代に消費者はどのような視点で太陽光発電に接すれば良いのか。一言で言えば事前に良く学習することだ。NPOなどが開く学習会などに出かけて知識を得てほしい。複数社の説明も聞くべきだ。その中で信頼できる実績のある販売施工業者をじっくり選ぶしかない。モニター募集と宣伝したり、契約を畳み掛ける業者は要注意だ。

設置後もメンテナンスフリーと謳ってはいるもののトラブルもある。15年間関わってきた経験から言えばどのメーカーも故障や不良品が出ている。パワーコンディショナーのトラブルは別として、太陽電池自体の出力低下を発見するにはこまめにデータを取るしか手はない。1ヶ月に1回はデータを取ることだ。データを取らない設置者には出力低下も解らない。

いずれにしても設置者はまず自分で監視するしかない。太陽光発電所ネットワークなどのNPOに参加するのも良いが、自分で学習して自立した賢い消費者になることが重要だ。高い買い物なのでそれぐらいの関心を持ってもらいたいというのが私の願いである。

